読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

横浜・八景島シーパラダイスが主催する海育塾で、ワカメの芽を種付けしたロープを海に面した屋外施設に投入する小学生たち（4・5面へ）

巻頭特集 コミュニケーション力高め、伝わる文章磨く
「新聞のちから」多彩なプログラム 2・3

海に学ぶ 第3部 漁業のあり方、野生動物との共生探る 4・5

新聞@スクールセミナー「AI時代 学びの質どう高める？」 6・7

『まんがでわかる 発想法 ひらめきを生む技術』5名様にプレゼント 8

リレーエッセー 英サウサンプトン大学 チャレンジによる成長 9

2019.3
Vol.51

コミュニケーション力高め、伝わる文章磨く

「新聞のちから」多彩なプログラム

読売新聞の研修プロジェクト「新聞のちから」は、スタートから４年目を迎え、現場のニーズに合わせた多彩なプログラムを展開している。京都では受講するために中小企業の若手経営者らが集まり、研修を通じて活発に交流している。町田市役所（東京）では、住民向けの案内文を講義の中で見直すなど、実践的な取り組みが目立つ。受講者は「ニュースに触れる大切さを知った」「伝わる文章の書き方がわかった」と話す。

中小企業

グループごとに作った壁新聞を使って、自己紹介する受講者たち（1月23日、京都市下京区で）＝伊東広路撮影

気になる記事もとに語る

作業服や背広姿の20～40歳代の男たちが会議室に集まった。それぞれが読売新聞の記事や漫画、広告の中から、気になるものを模造紙に貼った上で、自分の思いを語り始めた。

『コボちゃん』は、僕が独身時代に愛読していた漫画。僕の子供も（連載開始時の）コボちゃんと同い年（5歳）になったんだなあと思うと感慨深いです」

「この記事は、歌舞伎の演目『助六』で、花魁（おいらん）にモテモテだった色男の主人公のセリフを紹介しています。社員に愛され、お客さんに愛されたい、という僕の人生の目標にも通じるので、この記事を選びました」

1月23日夜、京都市中心部の京都府産業支援センターで開かれた「話すちからをつける　まわしよみ新聞講座」の一場面だ。12人の受講者は、京都機械金属中小企業青年連絡会（機青連、会員企業80社）のメンバーらで、府内でモノづくりに関わる中小企業の若手社長や後継者たち。「コミュニケーション力を高める」という講座の狙いに興味を持ち、参加している。

成果を仕事に生かせる

ついつい話に夢中になり、1人1分の制限時間を超えてしまう人も少なくない。1グループ4人の発表が終わるたびに、別のグループから「長すぎる」「何が言いたいのか、もう少し簡潔にまとめた方がいい」と厳しい指摘があがる。ベテランの読売記者の講師が「重要な事柄から書いていく新聞記事のように、結論から話せば伝わりやすい」とアドバイスを送る。受講者の表情は真剣そのものだ。

機青連代表幹事で、製缶・板金・総合建築施工会社「ナカモト」（京都市山科区）の5代目社長、中本幸志さん（44）は「時間やマンパワーの制約が厳しい中小企業でも、このように集まることで、自分たちの成長に必要な研修が受けられる。同じ境遇の経営者や後継者ばかりなので、刺激しあって学べるし、成果を自社の業務に生かせる」と話す。

他人との会話楽しくなった

研修の数日後、中本さんの元に、受講者の一人、山本秀幸さん（41）から「人との会話が苦手で、話すのがおっくうになっていた僕ですが、なんだか人と話すことが楽しくなった」との感想がメールで寄せられた。

山本さんは、祖父母が創業し、アルミ機械加工などを手がける「ヒルトップ」（京都府宇治市）の社員。両親が聴覚障害者のため、自宅では幼少時から手話で会話していた。そのためか、小中学校時代は、友達とおしゃべりがしにくいという悩みを抱えていた。「今でも会社の朝礼での一言や会議での議論は苦手」という。

だが、研修では、グループのメンバーが選んだ、一見バラバラの記事や広告から共通点を見いだし、壁新聞の統一テーマ（題字）を決めたり、自分が選んだ記事と関連づけて自己紹介したりしなければならない。自分の考えを整理して話し、一人一人の考えを取り入れて一つのモノを完成させる作業は刺激的で、「人とコミュニケーションを取るのって、こんなに楽しいんだなと思った」。

以前は「新聞嫌い」「活字嫌い」だったが、ページをめくると「自分の引き出しが増える」ことにも気づいた。記事から朝礼のネタを探してしゃべる練習を、山本さんは今も続けている。

まわしよみ新聞

数人のグループで持ち寄った新聞を読み比べ、気になった記事を切り抜き、感想を語り合って1枚の壁新聞に再編集する。大阪で街づくりのプロデューサーなどをしていた陸奥（むつ）賢さんが2012年、考案した「遊び」。情報を正しく読み取り、活用する能力やコミュニケーション能力を高める効果があるとして、学校教育や企業研修などに取り入れられている。

市役所

業務の時間短縮

東京南西部の町田市（人口約43万人）では、昨年7月から6か月間、24人の市役所職員が受講した。きっかけは石阪丈一市長が今年度から始めた「見直そう！〝伝わる日本語〟推進運動」。行政サービス向上のため、難解な専門用語や「お役所言葉」を見直す取り組みだ。そこで、伝わる文章を目指す「新聞のちから」研修を導入した。

長期間で課題提出も多いことを説明して、受講希望者を募ったところ、「若手を中心に意識の高い職員が集まった」と、職員課の西久保陽子係長（45）は振り返る。研修の前後に「日本語検定」も受検させた。「特に、市が実際に作成・発行した文書を教材として取り上げた講義は、すぐに業務に役立つと好評でした」

研修後の感想を取りまとめた同課の石川愛依子さん（29）は「文書を上司から直されることが少なくなった、業務の時間短縮に結びついた、という声があった。次年度も継続してほしいという要望がこんなに寄せられるのは珍しい」と話す。

丁寧な添削に納得

秘書課の竹内真未さん（27）は提出した課題について、「あんなに丁寧に添削されたのは初めて。こう書けば良かったのかと納得した。文章では言葉一つが大事で、今まで少し無頓着だったと気づきました」。

子育て推進課の益田望美さん（26）は、「市内の保育所などにメールを送る際、複雑な内容だと説明が長くなりがちだった。冒頭に結論を簡潔に書くなどの研修内容を実践したら、質問が減っています」という。

来年度も開講予定と聞くと、2人は「ぜひ受けたい」と声をそろえた。

研修を受けた益田さん（右）と竹内さんは「また受講したい」と意欲的だ

要望に応じてプログラム構成

「読む」「書く」「会話する」の力を底上げする「新聞のちから」の研修プログラムは、実践的で多彩なメニューを用意し、受講側のリクエストに応じてきめ細かく対応している。

「書く」では、ビジネスに不可欠なメールの作法や、企業や団体で運用しているホームページの文章の見直し、読まれる広報リリースの作り方など、現場ですぐに活用できるノウハウを伝授する。

「読む」「会話する」では、インターネットにあふれる情報の真贋（しんがん）の見極め方を学んだり、気になるニュースから会話の糸口をつかんでプレゼンテーション能力の向上を目指したりする。講義やワークショップの内容は「その日から使える」を重視している。

受講側との事前のヒアリングを通じて、「社員に幅広い世代とコミュニケーションできる力を付けたい」「簡潔で分かりやすいメールを書けるようにしたい」といった具体的なニーズをくみ取り、プログラムを微修正していく。加えて、効果を測定する「日本語検定」の団体特別試験を割引価格で受検できる。

研修には3か月と6か月の基本モデルがあり、新聞を活用するため、期間中、受講者には定期購読してもらう。原則として講師料や添削料不要。

新聞のちから

【問い合わせ】読売新聞東京本社
教育ネットワーク事務局「新聞のちから」担当
☎ 03・6739・6985（平日10：00～17：00）

漁業のあり方、野生動物との共生探る

「横浜・八景島シーパラダイス」（横浜市金沢区）が開催している「シーパラこども海育塾」。海の環境を親子で学ぶ教室の昨年11月から今年1月にかけての様子を、48号に引き続き紹介する。

海に学ぶ 第3部

写真・文　教育ネットワーク事務局専門委員・秋山哲也

（上）8匹のアナゴをつり上げた岩佐優日さん（左）。筒から取り出してもらうアナゴを、驚きながら見つめた　（右）アナゴ筒漁船に準備された筒

アナゴの習性利用

塩化ビニール製の筒の中から顔をのぞかせるのは、何匹ものアナゴたち。江戸前の主役は、そのしぐさにも実は一見の価値がある。

「かわいいでしょう。狭い筒の中に仲間と一緒にいると安心するのです。人間もこうでなくちゃね」

人なつっこい笑顔でこう話すのは、齋田芳之さん（63）。昨年11月18日、横浜市金沢区にある同市漁業協同組合柴支所で開かれていた。同漁協理事で江戸時代から続く漁師の家に育った齋田さんが講師を務めた。

齋田さんがまず見せたのがアナゴの生態写真。アナゴを捕まえる実物の筒もある。「アナゴ筒漁」は餌を入れた筒約600本を海底に沈めておく漁法で、狭い場所で肌を寄せ合って隠れるアナゴの習性を利用する。筒には返しがつき、中に入ると出られない仕組みだ。

よく見ると、筒の側面には大きな穴（直径13ミリ）と小さい穴（同9ミリ）が並んでいる。海から引き揚げる時の水切り用で、齋田さんが大きい穴に変えたという。

同漁協では、64隻の漁船で東京湾のタチウオやアジ、ヒラメなどを取る。齋田さんは自分の船を持った26歳からはアナゴ漁専門だが、漁獲量は減少傾向で「商売にどうにかなる程度」だ。

「逃して大きく成長したものを取れば付加価値も上がる」。齋田さんはそう思い立ち、神奈川県水産試験場や東京海洋大学と研究を重ね、最適な穴の大きさを突き止めた。この方式は資源管理に貢献するとして、2001年に水産庁長官賞を受賞。東京や千葉も含めた東京湾の漁師の間で18年も支持されているという。

釣りにも挑戦

齋田さんらはアナゴが泳ぐ水槽も準備してくれていた。塾生たちが筒を使った釣りに挑戦するためだ。

最多の8匹を筒に誘いこんだのが、金沢区の小学1年、岩佐優日（ゆうひ）さん（7）。「隅に集まる習性をよく観察していましたね」。齋田さんから褒められると、「初めてアナゴを見たんだけど……」とはにかんだ。

東京湾で取れなくなっているのは、アナゴだけではない。かつて一日で軽トラック1台分とれたシャコについては、不定期に禁漁期を設定している。塾生たちは漁業のこれからのあり方も学んだ。

あなご筒を手に説明する齋田さん

人間の勝手な都合で苦しむ野生生物

横浜・八景島シーパラダイス（横浜市金沢区）には、700種12万匹・頭もの生きものたちが暮らしている。その体調の異変に目を光らせているのが、飼育員とともに採血や体温測定などを日々行う4人の獣医師だ。

そのうちの1人で、昨年12月9日の「海育塾」で講師として登場したのが、大津大さん（48）。同施設の水族館支配人も務める獣医師歴24年目のベテラン。

弱ったスナメリの赤ちゃんにミルクを与える（八景島シーパラダイス提供）

で、その話がなんとも切ないものだった。

ある日、横浜市中区本牧沖にふらふら泳ぐイルカの仲間、スナメリの赤ちゃんがいると通報があった。駆けつけたスタッフが海に飛び込むと、スナメリの方から胸に飛び込んできた。親とは、なぜはぐれたのか。赤ちゃんは搬送された同水族館でミルクを与えられたが、衰弱が激しく1か月で死んでしまった。

ボートで尾びれを傷つけられ、ヤスまで刺さったイルカの最期はさらに無残だ。

「人を頼って餌を得ることしかできなくなり、人になれてしまった結果、自力では生活できずに施設の中で悲しい一生を終えたのです」。大津さんは人間の勝手な都合によって命を落としていく野生動物たちがいかに多いかを、淡々と伝えた。大津さんの映像や写真が示す事実に、塾生たちは押し黙っている。

川から流入

プラスチックゴミも、野生生物を傷つけている。「川から海に入り、多くの生きものたちが飲み込んでしまい、死んでいます。このことを学校のお友達にも伝えてくださいね」

大津さんの講義が終わって、塾生たちは海に面した屋外施設へ。晴天にも恵まれたこの日、子どもたちの深刻な表情もようやく解け、海藻のワカメの植え付けに挑戦した。ワカメはブルーカーボン（海中で二酸化炭素を吸って酸素を排出する）の代表格だ。

その時、小学1年生の中村一朗太君が突然、大声を上げた。「ゴミ、自然に悪いよー」。イルカ用プールの水面に浮いていたレジ袋を見つけたのだ。

「今朝、ポリ袋を飲み込んでしまったイルカが、それを吐き出した事件がありました」と、大津さんが講義で話したばかり。レジ袋は風に飛ばされたのかもしれない。私たちが意図しないところで、生きものたちが苦しんでいる。

シーパラこども海育（うみいく）塾

「横浜・八景島シーパラダイス」が2015年度に社会貢献事業として始め、横浜市や周辺の研究機関、大学、漁業協同組合などの協力で運営されている。2018年度は6月から19年3月まで全10回。親子で海の生きものを観察し、海洋環境などについて専門家などから学ぶ。

【後援】横浜市温暖化対策統括本部、読売新聞東京本社

チリモン探し

カタクチイワシに交じって、タコ、フグ、カニまでいる。見慣れている成魚と違うのは、小さすぎる体に加え、巨大すぎる頭と目。魚の赤ちゃんたちで、通称「チリメン・モンスター」。略して「チリモン」だ。

「海育塾」の塾生たちは1月20日、水産研究・教育機構の中央水産研究所（横浜市金沢区）にいた。漁業資源の管理や環境調査・研究などを行う施設で、この日は子どもたちのためにワークショップ「チリモン探し」が用意されていた。

シラス干しのことを関西では、チリメンと呼ぶ。「このワークショップは関西で始まったので、チリメン・モンスターと名付けられました」と、研究所の業務推進課長、市橋秀樹さん（60）が教えてくれた。

用意されたシラス干しは、食品として流通するものとは異なり、さまざまな魚種の稚魚が交じる選別前のもの。虫眼鏡を通して見る姿は確かに不気味ながらもかわいく、モンスター的風貌（ぼう）だ。

子どもたちは、皿に入れたシラス干しに虫眼鏡とつまようじを手に向き合い、見分け方のポイントがまとめられた冊子も参考に、ゲーム感覚で正体を当てていった。

さまざまな種類の「チリモン」を探す親子（竹内和佳子撮影）

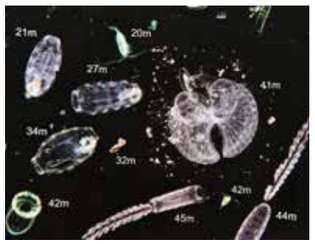
プランクトンを観察

こうしたチリモンたちは、私たちの食卓に上がるイワシやサバなどの餌となる。この日は、チリモンが食べる動・植物プランクトンを生きたまま観察できる機械（VPR）も見せてもらった。東京都千代田区から毎回参加する小学校3年の兒井梓（こい）さん（9）も、この機械で撮影した写真に見入っていた一人。

「プランクトンは小さいエビみたいなものだと思っていたけど、形や模様がとてもきれい」と、異世界でものぞき込んだような表情をした。

2月15日、この研究所が所有する調査船「蒼鷹丸（そうよう）」（892総トン）が今年度8回目となる航海に出港した。高知県沖などの黒潮域で、海水濃度や温度、放射線量などの測定を行う。

「小さな異変も見逃さないよう、生物学や海洋学の見地からデータを集め続ける任務は、続けてこそ意味があります」。出港を見送りに来た市橋さんは、地味ながら日本の漁業に欠かせない航海について、自らに言い聞かせるように説明してくれた。



VPRで撮影した深さと動物プランクトンの数々

新聞@スクール セミナー

AI時代 学びの質 どう高める？

「AI時代こそ新聞活用」をテーマにした「新聞@スクールセミナー」が2月23日、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれ、小中高校や大学の教員ら約90人が参加した。AI（人工知能）が進化を続ける中、学びの質を高めるために教室で新聞やデジタル機器をどのように活用すればよいのか、講演や座談会を通じて方策を探った。

「関連付け」養う教育を

赤堀侃司（かんじ）・日本教育情報化振興会会長（東工大名誉教授・教育工学／情報教育）が「AI時代の教育」と題して基調講演。赤堀氏は、人が出来て、AIには出来ないものに「感じる力」があり、これが人に記憶を残し、読解力を高めたと調査データを基に指摘。「人は感じることで、ものごとを関連付けることができる。AIは今のところこうした関連付けが出来ない」と続けた。

また、「関連付け出来れば、自分の意見が言えることにつながる。その能力を養っていくのがこれからの本当の教育だ」と述べ、関連付ける力を養う新聞活用学習が効果的だと話した。

総合的に読み解くことが大事

座談会では、益川弘如（ひろゆき）・聖心女子大教授（認知科学）が読解力には「深い処理」と「浅い処理」があると説明した。深い処理は、事実や書き手の解釈に基づく情報と読み手の持っている情報とを組み合わせ、新たな知識を創り上げるようなこと。浅い処理は、ただ字を読むだけのようなことで、「情報をうのみにしてすぐに共有する『浅い処理』で終わらせないようにする努力が必要だ」と提言した。

また、関口修司・日本新聞協会NIEコーディネーターが「AI時代に必要なのは深い読解力だが、文章や写真、グラフ、図などを総合的に読み解くことが大事で、新聞を読むことが有効」と話した。

都内公立小中学校の2教諭による新聞を使った授業例も紹介された。

会場の参加者は、「AIができないところ、感じることから物事を関連付け、自分の意見を形作るという教育を考えていかなければならないと感じた」（茨城・小学教諭）、「AI時代にも、新聞として果たす役割がたくさんあることを改めて認識した」（東京・教育委員会）、「新聞教育の必要性を認識した」（千葉・中学教諭）などと感想を話していた。

基調講演

赤堀侃司氏

「社会の仕組み」反映した学びを

AIやビッグデータが広がる中で、人材育成はとても重要だ。現状では、学校で習った問題と、社会で起きている問題とが切り離されている。これからAIがいろいろな分野で使われるようになるだろうが、子どもたちがきちんと接することが出来るようにするには、社会の仕組みを反映したことを学校の中でしっかり教えることが大切。

AIは今のところ関連付けができない。例えば、「夏、テニスをした。終わってから飲んだビールはおいしかった」という文について、AIに「なぜビールがおいしかったか」と聞くと、答えられない。しかし、人は「夏は暑い」「テニスをすると汗をかく」「ビールは冷やした方がうまい」など、いろいろな情報について抱く感情をつなぎあわせて、関連付けることができる。こうした「感じる力」が、読解力を高める。ここが人間のすごいところだ。

「感じる力」を高めることが、新学習指導要領の柱の一つである「学びに向かう力（学びへの意欲）」につながり、AI時代に大切になる。コンピューターにできない自由な発想やアイデアを生むため、他人と対話し、協力し、たえず改善していくことが肝要だ。

AIは学びを深めるパートナー

座談会

益川　人はどういうふうに学ぶかを研究している。他者と対話し、経験を積み重ねて学力が生まれる。学校で子どもたちは、生活や社会と関連づけながら学ぶといい。SNSで、下手すると中身も読まずにタイトルだけでシェアしてしまい、本人が気づいていなくてもフェイクニュースが拡散する現状がある。本人がしっかり読み取り、感じ、考えていかないといけない。

AI時代でも、新聞の強みは、幅広い情報に触れられること。全国版や地方版、社会・経済面、広告などがあり、取材を通して得た記者の付加的な情報や解釈もある。

関口　東京都北区の小学校3校で校長を務め、学校全体で新聞活用を実践した。「感じる力」が「学びに向かう力」になるという赤堀先生のお話は、非常に納得した。週1回の朝15分で、子ども自らが記事を選んで感想を書く「新聞タイム」は、それに適している。

特にこれまで国語では、図や表などを文章と合わせて読み取ることはあまり重視されてこなかったが、これからは必要だ。まさに新聞の出番だ。15校のデータだが、全国学力テストで全国平均と比べると、NIE（新聞活用学習）に取り組んでいる小学校は、国語・算数・理科と、幅広い教科で高得点になっている。

山岸　新聞タイムは、子どもが自然に新聞を読み、教師が手を貸さなくてもどんどんスキルアップしていく楽しい活動だ。

益川　AIという言葉が独り歩きしているが、まだたいしたことはできていないと思う。コンピューターはデータ処理が速く、メモリーが大きくなったが、人間が苦手な分野をAIが代行して、人間のよさを発揮できる時代になると考える。

赤堀　「関連付ける」「感じる」「創造する」「デザインする」という能力を、これからのAI時代にはもっと高めていく必要がある。紙とタブレット端末は、「両方をブレンド」して使ってほしい。特に小学校低学年は、鉛筆を使い、手を動かして紙に書かせるのが、脳にいい。

山岸　ネットだけでなく、本や新聞を活用する授業を意識している。

益川　AIは学びを深めるパートナーにするといい。

関口　便利なネットだけを使う子どもに育つことが心配だ。AI時代こそ、紙のよさを考える必要がある。

（右から）赤堀氏、益川教授、関口氏、山岸教諭

●座談会出席者
赤堀侃司（日本教育情報化振興会会長）
益川弘如（聖心女子大学教授）
関口修司（日本新聞協会NIEコーディネーター）
山岸幸枝（東京都荒川区立汐入小学校教諭）
司会：秋山純子（読売新聞教育ネットワーク事務局アドバイザー）

AI＝人工知能。Artificial Intelligenceの略。コンピューターが人間の知的な活動を行うこと。音声や画像の認識や、大量のデータの中から一貫性のある規則を見つけだそうとする機械学習など、近年急速に研究が進んでいる。

授業例紹介

目標は「読める、話せる、書ける」

東京・豊島区立明豊中学校
櫻井 直（ただし）教諭

「新聞スクラップレポート」の学習で、生徒は自由に選んだ記事に対する自分の考えを200字程度で書き、家族か友達に見せて意見を聞き、最終的な提案にまとめました。選んだ記事は、スマホ、AI、入試など様々。

高校の推薦入試にある集団討論の対策として、新聞を活用し、6人グループで「新元号」について議論させました。記事を読み、自分で新元号を考え、その元号に込めた願いと高校生活の抱負を交え話し合います。最近は都立高校の入試で時事問題のテーマが多く、今年は「AI活用例をあげ、その良い点と問題点を述べよ」がありました。

「読める、話せる、書ける」生徒の育成を目標に、各教科で新聞を活用しており、記事を読んで、隠した見出しを考えさせたり、新聞各紙を並べて1面記事の違いを比べたりする学習もしています。

新聞に親しむゲームから

東京・荒川区立汐入小学校
山岸幸枝 教諭

最初に授業で行うのは、新聞に親しむゲーム。「一番大きな数を探そう」では、児童は楽しそうにページをめくって予算や株価などの数字を見つけ、やがてどこに何が書いてあるか頭に入ってきます。次いで、見出し、リード、記事、写真や図表といった、読みやすい新聞の工夫を教えます。

「写真に題名をつけよう」で、児童は自分が選んだ写真を切り抜き、考え、感じたことの中心をはっきりさせて題名を書きます。

書く力をつける「4コマ漫画を説明しよう」では、自分の気持ちを説明出来なかった児童が、だんだん書けるようになります。

「説得力のある意見発表」で、切り抜いた記事を根拠に自分の意見を発表すると、格好よく、自信を持って言えます。感動した記事を主体的に選んで、自然に児童どうしの交流、対話が生まれ、書く、読む力がつき、学びを深めています。

まんがでわかる 発想法 ひらめきを生む技術

中央公論新社／原作：川喜田二郎、作画:山田しぶ／本体1,200円（税別）／四六判、160ページ

大ロングセラー 140万部突破 がまんがに

最強の発想術 わかりやすく

『まんがでわかる 発想法 ひらめきを生む技術』が中央公論新社から発売されました。累計140万部を超える中公新書の大ロングセラー『発想法』（川喜田二郎著）のエッセンスをまんがでわかりやすく伝える一冊です。

本書に登場する川喜田氏考案の「KJ法」は、データを集め、書き出し、関係性を図解にすることで、天才的な感覚や思いつきに頼らず、新しいアイデアや発想を導き出す手法です。新書の刊行から約半世紀たった今も、メーカーや百貨店、商社、大手企業や教育機関、地方自治体など、さまざまな組織で採用されています。

「新しいアイデアを生み出すことができない」という人だけでなく、「効果的なプレゼンをすることが出来ない」「業績をあげなければいけないのに、問題点を整理することが出来ない」などと悩んでいる人にも、KJ法は有効です。

本書は4つの章に分け、ストーリーまんがと要点をまとめた説明文を組み合わせて構成されています。楽しみながら、「グループ編成」や「A型図解化とB型文章化」など、アイデアを考える際のポイントを学ぶことができます。さらにコラムで、KJ法の正しい実践方法も紹介しています。

「よい企画やアイデアを提案したい」「ビジネスの問題を解決したい」と思っている社会人はもちろん、研究論文をまとめる大学生・中高生にも役立つ内容になっています。

STORY

家具メーカーで販売員として働く千夏。豊富な商品知識を買われ、第2企画室へスカウト。企画を考える力が無いと嘆く千夏に、大谷室長はデータからアイデアを導き出すKJ法を伝授する。同期の小雪も加わり、大谷の指導のもと、奮闘する二人。天才的な感覚や思いつきに頼らず、新企画は生まれるのか——

PRESENT

「まんがでわかる 発想法 ひらめきを生む技術」を5人にプレゼントします。

※締め切りは4月15日（月）。応募多数の場合は抽選。当選結果は発送をもって代えさせていただきます。

https://form.qooker.jp/Q/auto/ja/pre3/manga/

海外で学ぶ・リレーエッセー ㊿

英サウサンプトン大学　チャレンジによる成長

立命館高（京都府）卒、サウサンプトン大学（英国）3年（執筆時）
川本（かわもと）和（わたる）さん

日本ではサウサンプトンといえば、（英プレミアリーグの）サウサンプトンFCでプレーするサッカーの吉田麻也選手、あるいはタイタニック号が（氷山に衝突して）沈没する前に最後に出港した港町、として知られているかもしれない。しかしながら、ここで私が学んでいるのは、そのどちらとも関係ない。モータースポーツの最高峰、フォーミュラ・ワン（F1）がその理由である。英国はモータースポーツ産業の中心地として知られており、サウサンプトン大学は、レーシング・カーをより速くするのに欠かせない空気力学の研究で特に有名で、それを私は学んでいるのだ。

大学ではエンジニアリングの学生として、設計、製作、そして実験をする機会がカリキュラム内に多くあるのがうれしい。それに加えて、課外プロジェクトが数多く用意されていて、学生なら誰でも参加できる。つまり、講義で学んだことを実践的なエンジニアリングに応用できる機会がたくさんある、ということなのだ。

私は、課外プロジェクトとして学生フォーミュラ（Formula Student）に参加してきた。この活動では、各大学の学生チームが（タイヤと操縦席が覆われていない）フォーミュラカーを設計、製作し、世界中の他大学チームとその出来を競うのである。このチームに加わって2年目、私は空力部門の共同リーダーになった。だが、そのときまだ2年生だったので、車の空力特性とシミュレーション技術の開発を率いるのは至難だった。チームは何度も失敗を繰り返した。教科書や講義どおりにことは進まなかった。実際はもっと複雑なものなのだ。一つのささいな要素を見落として望まない結果を得るのは簡単だが、実践での間違いを特定していく過程でテーマの理解を深めることができた。

実は、これは他の何にでも当てはまる。いつも最初は知識が不足していて、英国での大学生活では、チャレンジと失敗にもがき続けてきた。しかしながら、これらの数え切れない実践でのミスを通して、多くのことを学び、成長してきた。これらの教訓と経験は、私にとっての夢の仕事場、F1チームでの1年間のインターンシップを獲得するのに役立った。

このインターンシップを終えて、今は最終学年として大学に戻ってきた。新たなチャレンジに満ちた1年間である。

正直言って、新しいことに取り組み、実践していくことにはいつも恐怖心が付きまとうが、何かにチャレンジせずに学べるものなどあるのだろうか――と思っている。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2018年12月13日）

川本和さん（前列左）と学生フォーミュラの空力学チームのメンバー＝本人提供

サウサンプトン大学

英南部サウサンプトンに位置する研究主導型大学。1862年に地域の学識経験者らによる文化センターとして発足、1952年に英国立大学となった。1万4000人近い学生、大学院生のうち、留学生は135か国から6500人が在学している。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイトへ。 http://ryu-fellow.org

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0005005011でお読みいただけます。

今後もきめ細かく情報アップ

読売教育ネットワーク会報は、これまでネットワークのウェブサイトに毎月掲載していましたが、4月からは会報という形ではなく、様々なテーマについてニュースやルポ、読み物をサイトの各ジャンルに随時掲載します。これまで以上にきめ細かく教育関連の役立つ情報を紹介していきますので、引き続き、教育ネットワークのウェブサイトをよろしくお願いいたします。